

## 武蔵野日曜集会

## 真の平和

——ルカ伝第12章49～53節、14章15～24節——

1968年10月13日

小池辰雄

私の十字架を見てくれ 本当の和の世界 神さまの招きを断る 「主さま！」の一念 聖霊と  
いう大饗宴を食べなさい

## 【ルカ12・49～53】

49 我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。51われ地に平和を与えんために来ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。52今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分れ争わん。53父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、姑は嫁に、嫁は姑に分れ争わん』

## 【ルカ14・15～24】

15 同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言う『おおよそ神の国にて食事する者は幸福なり』16之に言いたもう『或人、盛んなる夕餐を設けて、多くの人を招く。17夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「来れ、既に備りたり」と言わしめたるに、18皆ひとしく辞りはじむ。初の者いう「われ田地を買えり、往きて見ざるを得ず。請う、許されんことを」19他の者いう「われ五くびきの牛を買えり、之を験すために往くなり。請う、許されんことを」20また他の者いう「われ妻を娶れり、此の故に往くこと能わず」21僕かえりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いかりて僕に言う「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此処に連れきたれ」22僕いう「主よ、仰のごとく為したれど、なお余の席あり」23主人、僕に言う「道や籬の辺にゆき、人々を強いて連れきたり、我が家に充たしめよ。24われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味得る者なし』」

## ●私の十字架を見てくれ

49 我は火を地に投ぜんとて来れり。



「火」とは聖霊の火のことです。

此の火ですでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

この火がすでに燃えたら、もう私は何も望まない。何をか要しない。

50 されど我には受くべきバプテスマあり。

けれども、この火を送るためには、自分は受くべきバプテスマがある。十字架のことです。

その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。

キリストのこのルカ伝12章49節の言葉は、読んでいますと、もう非常に熱くなってくる。聖霊のことが今、世界のキリスト教は死んでいる。ニーチェは

「神は死んだ」

と言ったけれども、そうではない。その当時のキリスト教の神が死んでいる。神は厳として生きてあり給う。あのニーチェの言葉は反語的に当時のキリスト教に対する批判です。

熱くない火がありますか。また、冷たくない水があるか。生命のないクリスチャンがあるか。我々には、このキリストは活けるキリストである。今もなお、二千年前と同じく天界に、霊界に生きてあり給うところのキリストである。キリストが生きてあり給うということが本当に感ぜられているか。

この「信ずる」ということは、

「分かりませんが、まあ、そうでしょう」

というのは決して「信ずる」ではない。ここにコップがある。私は手でコップを今にぎっている。それよりももっと確かに主さまは生きてあり給う。何よりも確かなことは、主は生きてあり給うということです。このことを本当に全存在をもって私たちが受けとっているならば、確かに違ってくるはずです。

この主さまは私たちと関わりのない主ではない。この活ける主は、どうしても私たちを同じ生きものに、生けるものになしたい。

「我生く、ゆえに汝生く」

という。旧約にそういう言葉がある。そのキリストは私たちに、この地上にいらっしやうたときに弟子たちに、

「お前たちを孤児にしない。必ず、お前たちと一緒にいる」

と言われた。いや実に、中に入ってくる。その約束を果たすために、

「わが受くべきバプテスマがある」

と。これが十字架である。

私たちはどうにもならん、しょうがないやつです。このどうにもならんしょうがないやつをどうにかすることのできたのは、ただ一人、イエス・キリストです。自分の信仰とか、自分の聖書知識とか、自分の実存だとか、そんなものをいつまでも問題にしたってしょうがない。キリストというひとは、私たちをあるがままですつ飛ばしてしまふ。



「お前は、相変わらずしようがないな。だけれども、すつ飛んでいるよ。お前なんていうものはどこかへ行ってしまった。まだ、いろんなことを言って苦しんで、それでも何だのと言っているけれども、自我なんてものをいつまで問題にして何になるか」

と。ノイローゼになりそうになったり、いろんな人がありますけれども、もつと簡単に、もうそのままでもいい。

「そのままでもう問題は解決済みだよ。私の十字架を見てくれ、十字架の私を」と。

「十字架につけられたままなる主イエス・キリスト」

と、ガラテヤ書でパウロが言いました。この「十字架につけられたままの」ということです。この「受くべきバプテスマ」を受けた贖罪の大業の二千年前の事実は、今もなお私たちに現に今の事実として迫っている。迫るのは、何も私たちを苦しめるために迫っているのではない。解放するために、楽にするために迫っている。

### ● 本当の和の世界

キリストは、

「これを受けるためにはもう左顧右眊はない。その時は人に嫌われるぞ。覚悟しろ」というのが、

51われ地に平和を与えんために来る<sup>きた</sup>と思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。52今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分れ争わん。53父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、<sup>しゅうとめ</sup>姑は嫁に、嫁は姑に分れ争わん」

と。実に危険思想を、危険千万なことを仰る。家中をガタガタにするという。

さきほどのKさんのお話ではないけれども、彼が路傍説教で救われた。路傍説教を、君たちみたいなた青年がやっていたんだよ、御霊の火が燃えている青年が。たまたま彼もある極限状況においてそれを聞いた。それで彼に火がついた。そして今度は、家に帰って、やっただけですよ。始めは抵抗があったに相違ない。あの素晴らしいおばあちゃんも、彼が生んだんです。家中、始めはガタガタしたろうけれども。しかし、キリストが分争を起すのは、

「平和ではない、分争だ」

と言われたのは、最後はもちろん平和なんです。そこを通して本当の和の世界にもっていく。これは彼がその証人です。

その本ものの世界に入るときに、左顧右眊していたら、いつまでたっても本ものは出てこない。キリストのこのような烈しい言葉は、



「神―キリスト―我」のこの縦の貫きを100%にしる。そのためには、横がどうなるろうと、そんなことはよろしい」

と。けれども、ここに来たもの凄い火の玉がそのうちに、これは分争かと思つたところが、それらを全部キリストの中に入れてしまう。必ず大きなエクレシヤという形に展開していくようになる。

### ● 神さまの招きを断る

今度はもう一つ、別なところを開いていただきます。ルカ伝14章15節、

15 同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言う『おおよそ神の国にて食事する者は幸福なり』16 之に言いたもう『或人、盛んなる夕餐を設けて、多くの人を招く。17 夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「来れ、既に備りたり」と言わしめたるに、18 皆ひとしく辞りはじむ。初の者いう「われ田地を買えり、往きて見ざるを得ず。請う、許されんことを」

「ちよつとお待ちください。田畑を買つたので、その交渉をしないことには」

と。こつちのが先だというわけです。いかにも謙遜そうですよ。

19 他の者いう「われ五くびきの牛を買えり、之を験すために往くなり。請う、許されんことを」20 また他の者いう「われ妻を娶れり、此の故に往くこと能わず」

今だと、たとえば、どこかで会おうと思つたけれども、

「今日はよします」  
なんて言つて来ない。

21 僕かえりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いかりて僕に言う「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此処に連れきたれ」22 僕いう「主よ、仰のごとく為したれど、なお余の席あり」23 主人、僕に言う「道や籬の辺にゆき、人々を強いて連れきたり、我が家に充たしめよ。24 われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味い得る者なし」

と。イエスはよく饗宴や婚筵の譬話を仰います。「羔の婚姻」という。羔の婚姻は、最後に新天地が来たときに偉大なる祝福の姿です。藤井先生の「羔の婚姻」という偉大な詩があります。要するに、そういった祝福された天国に招かれようとする。私たちの普通的事態においては、この集会はこのような盛んなる夕餐です。

みな、第二義的なことで、この世の大事そうなことで神さまの招きを断る。結婚のこともこの場合には、「われ妻を娶れり」と、ちよつとこの世的につかまえられています。まあ、結婚そのものはまた別問題でしようけれども。とにかく、今招かれたことに対して――こ



これはキリストの譬えにおいては第一義である——この招きに行きそこなうと、もう再びそこへは入れない。我々の日常生活において第一義をはずしていくと、その路はだんだん坂が下りていく路なんです。第一義をつかまえていくと、どんなにそれが峻厳な険路であろうと、足に傷がつこうが血が流れようが、これは天の方へ向かっていく。路は二つに分かれる。下る路はいかにも楽そうだけれども、楽な路は、第二義以下の路は下へおりていく。地獄の方に下りていく。片一方は天界の方に進んでいく。

何もこの集会のことだけを言うわけではありませんけれども、我々の生活において第一義をはずすようなことがないように、キリストがはつきり言っておられる。特に具体的に申しますと、やはり私たちの集会というものは、これは戦いなんです。戦いというのはお互いが戦うことではない。本当に力強い群として、サタンの力に対する戦いの実力を、お互いに打って一丸となつてつけていくことがこの集会なんです。その神の力、キリストの力をいただくために来ているのに、それから漏れたら、非常に自分自身がマイナスとなるし、この群がマイナスになる。出席そのものがそれだけの責任と課題と光栄とを担っている出席席です。

東京も京都もどこの集会にしたつて同じことです。

「お勤めでなんかで絶対に来るな。毎回、集会を真剣勝負でやっているんだから」

と私は言います。理屈をつけて、

「今日はこういうわけで行けません」

と、電話がかかってくるよ。

「ああ、そうですか」

と私は言いますけれども、本当は「ダメだよ」と言うんだ。電話ではそんなことは言わなければいけません。

「日曜は、私は神さまと歩くんだ」

ということなんです。日曜は神さまのことなんです。これはこの日本では特に戦わなくてはいけません。

私は学校に勤めていて、それがどうしても職業柄できないことがあつて非常に申し訳ないと思うけれども。それで仕方がないから、夜、集会をしたりすることがあります。けれども、とにかく日曜はできるだけ皆さんはこれを守らなくてはダメです。明日、試験があつたつて、日曜は来なくては。私は正直、学生時代に翌日試験があつたつて、日曜はこの世の勉強はしなかった。月曜の朝三時ごろ起きて勉強した。

とにかく、何も律法おきてではないけれども、キリストを愛するならば、御霊の事態の戦いとなつたならば、それが喜んで遊あそんでくるようになる。お客さんが来たら、集会に引つ張つて来るくらいなことになる。一時間話さなければならぬところを、お客さんと五分話して、さつさつと出てくればいい。女の方はなかなかそれができかねるかも知れないけれども、



女の方でもそれをしなくてはいかん。先方は、

「なるほど、あの方はそういう方なんだ」

と思って、もう日曜日に来なくなる。そういうところはやはり、福音第一でもって——何も集会ばかりではありませんが——生きていく。そういうところに、私たちに御霊の主が本当に燃えて進んでいく、ひとつの鍛えられ方でもあるわけです。

### ●「主さま！」の一念

「この火燃えたらんには」

という。

「この火という火が、何か私は燃えたでしょうか。燃えてないでしょうか。どうも

わかりません」

なんて言う。いいですか。体験というものは、こちら側の心理的な状態をいうようなそういう体験ではないですよ。

ちよつと仏教の方の言葉を引きてみましょう。

「一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざるものをば、これを正定の業と名づく、かの仏願に順ずるがゆえに。」（源信『往生要集』）

と。心にもつぱら弥陀の名号を——南無阿弥陀仏と——念じて行住坐臥、歩こうが坐ろうが普通の我々の日常生活において、その時節の久近を問わず、その時が久しいか近いとか、そういう時を考えないで、いつも——やはりこれは今ということですよ——いつも今としてそのことを念ずる。念々そうしたことを捨てざるもの、今言った念仏の事態を捨てざるものは、これを正定の業と名づく。これが本当の正定の業である。それはどういうことかという、かの仏の願いに順ずる。これは仏願、本願です。仏の本願にそれは、こういうことが順じているかという。念々、南無阿弥陀仏を思うことは仏の本願に應ずることである。そういうような在り方が仏と本当に一つとなっている姿である。それだから、成仏は難しいえども、往生は易しい。

「仏の願力を強縁として凡夫、浄土に往生する」

という。「仏の願力を強縁として」とはおもしろいことを言う。仏の願いの力を力強い縁として、ダメな凡夫も浄土に往生するという。

仏の世界でもやはり本願の力で動いていくんです。私たちは、

「主イエス・キリスト」

と念ずる。「主イエス・キリスト」と全存在をもつて念ずることは、実はキリストの愛が私たちをして力をもつて動かしている。キリストの霊が動かしている。それと同じことが、いやもつと力強い意味において我々の信仰の事態はそうである。

「この火燃えたらんには」



と言って、キリストはいつも私たちの中に、この聖霊の火が燃えてあることを望んでおられる。そして、それはもうはつきりと十字架の門で開かれて、いつも無条件にすぐ入ってきてくださる。扉を叩いていらっしやるから、開ければ、すぐ来てくださる。呼べば、すぐ私たちの中に来てくださる。

何もいわゆる体験でも何でもない。なんと簡単なことか。どうぞ、単純になつてください。それはもう自分の中に来てくださっている。皆さんが目をつぶって、

「主さまー！」

と呼ぶ。他にしようがないじゃないですか、「主さまー！」というのが祈りですから。「主さまー！」と言えば、もう贖いとられていて私ですよ。贖いとられていてあなた方一人ひとりですよ。実に贖いとられて、もう問題は何もない。あるがまま、贖いとられている。「主さまー！」と言って、グーツとその中に入る。

### ●聖霊という大饗宴を食べなさい

「父の我を愛し給いしごとく、我なんじらを愛す。わが愛に居れ」

あのヨハネ伝15章の葡萄の樹の譬えのところは素晴らしいところです。

「父は私をこんなに愛してくださって、私は父の中にいつも居る。そのように私はお前たちを愛して、この十字架ですつかりもう片が済んで、お前たちの中に入つていく」

と。この愛は本当に霊の力です。聖霊と愛とは離すことができません。聖霊の別の名前は「愛」というだけの話です。そして、その愛はもの凄い力を持っている。それはどのような人にもどのように表れようと、もの凄い力を持っている。外側はいかにも弱そうに見えても、もの凄い力が入っていく。これは原始力ですから。生命の本当の原始力です。だから、もうこれを受けてくれればいい。

「これを受けさせるために私は呼んでいる。この私の聖霊という大饗宴を食べなさい」と。なぜ、この集会においてそれを本当に食べないのか。せつかく与えようとしているお

刺身を食べないで、何かこつち側の葉っぱばかりを食べていたつてしようがない。もうあなた方はグーツとその中にお入りになつていらっしやることを私は信じますがね。

それでは、我々は何のためにそのようなことを受けたか。私たちがただ自ら喜ぶためではない。これは本当に、いろんな苦しんでいる人、悩んでいる人、悲しんでいる人に、どんな事態に対しても、今死に臨んでいる人に対しても、獄にある人に対しても、癌にかかっている人に対しても、もう死を突破して本当の生命にその人を生かしてしまう。たとえば肉体は死んでも、生かしてしまう。いかなる人に対しても、行き詰まりを知らないものはこの聖霊の愛です。この生命です。この生命の他に本当に人を救うものはない。これはキリ



ストです。主イエス・キリストです。

我々が今呼ばれているのは、

「この火を投ぜんがために。お前たちはこの火を、キリストを万里のかなたまで展

開して行け」

と。霊の灯火ともしびを万里の彼方に灯していく。霊灯万里です。皆さん、一人ひとりはその凄いですよ。これは原始力です。水素爆弾だって何だって、そんなものはへいちゃらですから。この人間の肉体だって、これを100%に原子力的に活用したら、親指一本でもって、昔の話だけでも、戦艦一隻を一年間まわすだけの力を持っている。人間の肉体というものは、もし原子力化すれば、それだけの力があるそうさ。もの凄いの。いわんや私たちのキリストの霊はもの凄いの力です。救いの力ですよ、倒す力ではない。

それが、経済の問題であろうと、政治の問題であろうと、学問の問題であろうと、何に向かっても本当の展開をしていく。そういう意味において、有機体的に働いていくわけです。今、日本に偉大な政治家が、その聖霊の器が出てくれば、それだけの魂が出てくれば、ソ連やアメリカや中共を本当に大きく執成すことができるでしょう。もう小細工をやったり、政党の争いなんて、そんなことではない。学者も本当に真理の権威をもつてその真理に殉ずるだけの学者が出てこなくてはいいかん。何でもそうですよ。絵を書けば、レンブラントも驚くような絵を描いてもらいたい。これからはそれだけ白熱的に燃焼しなくては。皆さん、キリストがそのことを皆さんに期待している。もう左顧右眄はない。まっしぐらに進んでいく。では、祈ります。

